

問題の背景

人間のペニスは、包皮によって亀頭が保護されているのが生来の姿であるが、その包皮の存在をことさら否定的にみる文化や風習が世界中に存在する。信仰の証として乳幼児のときに包皮を切除するユダヤやイスラムの民や、成人になるための通過儀礼としてそれをおこなうアフリカや太平洋諸国の文化・風習などがその例である。これとは別に、英語圏（特に米国）では、19世紀末から戦後にかけて、（宗教とは関係なく）保健医療関係者が推奨する形で包皮切除術がおこなわれるようになった。さらには、そうした米国の影響か、韓国でも大多数の男児が切除術を受けるようになった時期がある。

他方、過去30年ほどの間には、FGC/FGMに対する非難に続いて、包皮切除術についても、保健衛生・医療上の「利点」を疑問視し、むしろこれがもたらしうるリスクが議論されるようになってきた。身体の自律とインテグリティは基本的人権であり、インフォームド・コンセントを伴わない包皮切除術は禁止すべき、とする社会運動（Intactivism=無欠主義アクティビズム）の始まりである。すでに複数の欧州諸国・地域では、FGC/FGMに加えて（同意年齢に達していない）男児への包皮切除術を禁止する法律や条例が制定され始めている。もっとも、このような状況に対する宗教関係者や推奨派の医療関係者の反発・反論は根強い。ドイツでは、信仰の自由を訴える主張（宗教上の「割礼」）を認める判例もある。医療上の利点（亀頭包皮炎や性感染症、陰茎がんの予防など）を主張する声も強く、2012年に米国の小児科学会は、「包皮切除の利点はリスクを上回る（ただし、すべての男児への包皮切除実施を推奨するほどではない）」という声明を発表するなど、賛成・反対をめぐる激しい論争が続いている。

このような世界の状況において、特異な位置を占めるのが日本社会である。国内の専門家は「切らない」ことを奨励しており、実際、早期の包皮切除術は一般的ではない。しかしその一方では、諸外国では存在しないに等しい「仮性包茎」という概念が広く浸透しており、医療の専門家が「包茎には、仮性包茎・真性包茎・嵌頓（かんとん）包茎の3種類がある」と説明するほどである。（仮性）包茎は、日本人男性のペニスに関する3大コンプレックスのひとつとされ、「女性に嫌われる、臭い、病気になる、ペニスが成長しない、精神的にコンプレックスになる一。これらのストーリーが長きに渡って飽きることなく反復されつづけている」（澁谷, 2018: 110）と指摘されている。

調査概要

- ◆ 調査目的： ペニスの包皮をめぐる問題が「切る？切らない？」に焦点化される傾向のある諸外国に対して、国内の専門家は「切らない」ことを奨励しており、実際、早期の包皮切除術は一般的ではない。他方、日本には「切る？切らない？」と対比して「むく？むかない？」をめぐる議論が存在する。しかし、これについて国内の専門家の見解は様々ではなく、国内の先行文献資料においては「むく」保健指導の正当性を担保する科学的データや、包皮の状態およびケアのありようを明らかにしたデータが圧倒的に不足している。そこで、望ましい保健指導をめぐる議論に資するデータを収集すべく、「ペニスの包皮とケア」に関する実態を明らかにすることを目的に調査を実施した。

◆ 調査方法

- ◆ 方法： Survey MonkeyによるWEB調査
- ◆ 対象： 日本人男性（18歳以上）
- ◆ 期間： 2019年8月1日～31日の1ヶ月間

◆ 回答者の属性

- ◆ 国籍： 日本 99%、外国 1%
- ◆ 年齢： 20代 31%、30代 27%、40代 21%、50代 9%、60代以上 3%

日本におけるペニスの包皮とケアに関する調査

全アクセス 4849 → 回答完了 4126

(外国籍37名を含む)



結果速報（簡易版）は、大阪府立大学のサイトで後日公表されます。
<http://www.human.osakafu-u.ac.jp/higashi/topics/>
みなさまの回答は貴重なデータとして、学会発表など学術活動に活用させていただきます。ありがとうございました。